

教会学校だより

ま 播 かれた たね 種

The Eastern Diocese of the Orthodox Church in Japan



ご自身の中に天国を保持された方が天に昇られました。

自分の中に地獄を抱く者は地獄に行き着きますが、霊（たましい）の中に天国を抱く者は、天に昇ります。実に、中に天国を持っている人以外、誰も天に昇ることはできないのです。そして、中に地獄を持っている人以外、誰も地獄に陥ることはできません。

親しいものは親しいものに引き寄せられ、親しいものと一致します。しかし、馴染みのないものは拒絶するのです。

聖ニコライ・ヴェリミロヴィッチ

上磯ハリストス正教会開教150年に向けて

上磯ハリストス正教会では、昨年信徒総会において、2026年に迎える開教150年に向けて記念行事実行委員会を立ち上げて取り組んでいる。若い人たちを中心に、どんな記念行事にするかを自由な発想で話し合い、これまでに写真収集、沿革の調査等を進めている。自分たちが成し遂げたという充実感を得られるように、時間をかけて頑張ってもらいたい。この度は実行委員会をリードする二人に、それぞれの思いを寄稿していただいた。



アルカディ 佐藤 智美

2026年に上磯ハリストス正教会は開教150周年を迎えます。昨年、実行委員会を立ち上げました。現在150年という節目に向けて史実の確認や写真の整理を行っています。

1876年(明治9年3月)アナトリイ修道司祭より、イオアン大村萬助、ペトル田中西松、パウエル萬之助の3名が洗礼を受け、上磯に正教会の灯がともされました。イオアン大村萬助の家を講義所と定め活動していたようです。非常に熱心に伝道し、主の福音を聞く者が少しずつ増え始め、家の講義所では不便を感じるほどになったそうです。やがて、初代、2代目の会堂を経て現在3代目となる「主の昇天聖堂」が建立されました。

この度の写真整理中に目にしたのは、現在の3代目聖堂を建てるために、当時の管轄司祭、信者が、旧聖堂の解体、排水工事、基礎工事をしている写真です。休憩中に写る顔は笑顔で、疲れを伺わせない、労力を惜しまない表情で、聖堂を建てるという喜びに満ちています。このスケールの大きな事業は昭和62年11月に完成。明治期に灯された信仰を引き継ぎ将来へ、未来へ繋げたい揺るがない信念が強く感じられる出来事でした。



▲旧会堂の解体



▲作業を一段落して記念写真



▲信徒の手弁当で協力した現聖堂建設

私達は当たり前ここに教会があると思いがちです。当時の歴史を知る人が少なくなってくる現実に、先人に対する感謝の気持ちと信仰と歴史を将来と未来へ引き継ぐ開教150周年にしたいと考えています。それには地固めとして参拝者を増やすために、既存の信者の掘り起こしは必須と考えます。その第一歩として、お便りに記憶の用紙と書き方の案内を同封して(案外書き方を忘れていない方がいます。なかなか人に聞けないこともあると思います)、復活祭には事前に家族、知人の為に「記憶」する事を呼びかけました。効果は

ありました。復活祭に記入した記憶用紙を持参してくれました。しばらく続けて様子を見てみたいと思います。単発の短い簡単なアプローチは大事と感じます。まずは一步前進です。色々知恵を出し合ってチャレンジしていくつもりです。

また、歴史を後世に引き継ぐ資料の充実を目的として先輩信者に往時のことを拝聴したりしています。その写真のデジタル化やイベント企画、記念品等の立案、まだまだ多くの課題はありますが若いメンバーも非常に協力的で力強いです。



シメオン 坂下 洋孝

ここ数年で、上磯ハリストス正教会は、若い人達が増えつつ教会自体も活発になり、行事等の参加も若い人達が集まるようになり大変良い傾向になってきています。私自身も、この数年前から教会の方へできる限り顔を出すようになり、正教会の事はそんなに詳しくないのですが、これから少しでも正教会の事を覚えたいと思っています。

まだ、若い信者さんは沢山おられますが、そんな人達にも教会に参拝してほしいです。そのためには、教会に行きやすい環境等を作っていかなければならないと思います。教会に行きやすい環境とは何かと聞かれたら、これまた難しい問題だと思いますが、私が思うには、まず正教会とはどのような宗教なのかを理解して、興味を持つようにすればいいのかと思います。例えば今、函館ハリストス正教会でやっている伝道会などに参加してもらえようように声をかけて、若い人達に興味を持ってもらうとか。いろんなことを考えていかなければならないと思っています。

また、もともと仏教の人が洗礼を受けて信者になると、仏教に比べて行事が多くて大変だと思う人達もおられますが、このような人達が少しでもそう思わないようにするためにはどうすべきか皆で考え行動をしていきたいと思っています。そうしながら、管轄神父、年配信者、若年信者皆で正教会を守っていききたいと思っています。

上磯ハリストス正教会は、開教150年に向かい実行委員会を設け、50代信者が先頭になり、信者皆で成功させたいと考えています。そのためには、管轄神父、年配信者の助言を取り入れて、皆一丸となって、開教150年の事業を成功させたいと思っています。

最後に、年配信者、若年信者が一人でも多く教会に足を運んでくれるよう、皆で頑張っていきましょう。



▲記念行事の話し合い



▲墓地の草刈りなどの奉仕も積極的に呼び掛けている



What a Wonderful World

司祭 ピーメン 松島 拓

私たちは嬉しいことや楽しいこともあるけれど、辛いことや腹立たしいこともたくさんある「この世界」の住人です。今回は正教会が「この世界」について、そしてこの世に住む「人間」についてどのように考えているか、ごく簡単に砕けた言葉でお話ししたいと思います。

正教会では「この世界」は神様によって造られたと教えています。神さまは究極に「善なる方」なので、この方が造るものも皆「善なるもの」です。見えるものも見えないものも、動物も植物も、人間も天使も、全て「善なるもの」として造られています。これが正教会の世界観の基本です。「善なる方」が「善なるもの」として「この世界」を作ったのです。ああ、世界って素晴らしい。

…と言いたいところですが、この世界がそんなに素晴らしいばかりでないことも皆さんよくご存じだと思います。

世界には憎しみや妬みがあります。欲望に駆られて人を傷つける人がいます。世界から戦争が絶えたこともありません。「この世界が善である」なんて教会の嘘だ、耳当たりのいい気休めだ、と思う人もいるかもしれませんね。しかしそれには理由があります。

神さまは人間や天使を創造したときに「自由な意志」を与えました。「神を選ぶことも拒絶することも可能な意志」です。神は人間や天使を自分の思い通りに動くロボットではなく、完全に独立した意志を持つ存在として造りました。そうでなければ神と人間や天使たちの間に本当の「愛」が実現されないからです。人間同士だって強制や無理強い、洗脳で成り立つような関係は「愛」ではないですよ。しかしその自由意志を自分のためだけに、むしろ神に歯向かうために使う存在が現れました。それが「悪魔」です。悪魔は天使の一員でした。彼は何より自分自身が大好きなうぬぼれ屋で自己中心的な存在です。悪魔にとって神は「自分の創造主」であり、彼の自己中心性とまったく相容れない存在です。自分が一番強く美しいと悪魔は思いたいのに、完全無欠な神がいるので自分は永遠に一番になる事ができないことを知っています。だから悪魔は神を憎み、神を拒絶し、神の作った「善なるもの」であるこの世界や人間たちをめちゃくちゃに壊して汚してやりたいと望んでいます。

また人間にも「自由意志」があるので、悪魔の誘惑を拒絶することも、受け入れて悪魔と同じような自己中心性に溺れることも、どちらも可能なのです。この世にはびこる悪は、みな悪魔が人間の自由な意志を利用して神に歯向かおうとした結果なのです。ああ、世に悪の種は尽きまじ。

しかしだからこそ私たちは忘れてはならないのです、「この世界や人間は本質的には善なるものである」ということを。悪に染まっているようにしか見えない人がいたとしても、その人も本質では善なるものです。悪い人に「悪魔の手先の悪人め、お前なんて死んでしまえ、滅んでしまえ」と思うのならば、それは神が作った大切な存在を呪うという罪なのです。また自分自身を「ダメな人間だ、クズだ、自分なんて嫌いだ」と自己卑下に溺れてしまうのであれば、それもまた神の大切な存在を汚す罪となるのです。自分自身も、他者もそりゃあ罪深い部分はあるし、墮落もしているでしょう。しかしそれを憎まず絶望せず、本質は「善なるもの」だと信じて、神を頼りに生きていくというのが正教徒の「この世界」における正しい生き方なのです。



ソテリア クエスト SOTERIA QUEST

ファンタジー寓話 作:ダヴィド水口



勇者ティクヴァは胸を震わせた。

暗い暗い洞窟の奥、ようやくそこにたどり着いたのだ。ここまでの道のりは遠くけわしかった。いくつもの峠を越え、谷を降り、風雪に耐え、崖をよじ登り、急流を泳ぎ、どう猛な獣たちと戦い、飢えと渴きを忍び、しかし胸に抱いた一つの希望だけをたよりに、とうとう「それ」を眼前にしたのだ。「それ」とは、大きな岩に突き刺さっている真っ赤に燃える剣だ。洞窟の中は、その炎の光に照らされて明るくなっている。勇者ティクヴァは、炎の剣を岩から引き抜き、頭の上に高くかざした。

「これで、あの恐るべきマヴェットを倒すことができる」。

勇者ティクヴァの胸の鼓動はさらに高く速くなった。

ここは鉄の国。人々の体は鉄でできている。そしてその心も鉄のように固い。良い意味ではなく悪い意味で。つまり、頑固で自己中心的に凝り固まり、いつも冷ややかで融通が利かず、互いにぶつかり合っては争いばかりしている。

しかし初めからそうではなかった。心まで鉄にしたのは、マヴェットという魔王のせいだった。マヴェットの力は鉄の国全体を支配し、世の中は不条理に満ちた。その不条理はあまりにも長く続いたため、多くの人々は、戦うことをあきらめ、いつのまにか不条理こそが自然だと勘違いするようになった。しかし、勇者ティクヴァのように希望をもつ人々は、いつか必ずマヴェットを倒す日が来ることを待ち望んでいたのである。

これまでも鉄の剣でマヴェットに立ち向かった人々はいた。しかし、マヴェットには鉄は通用しない。それどころか鉄はマヴェットの好物になってしまった。マヴェットを倒す方法、それは天から降りて来る「聖なる火」しかなかった。

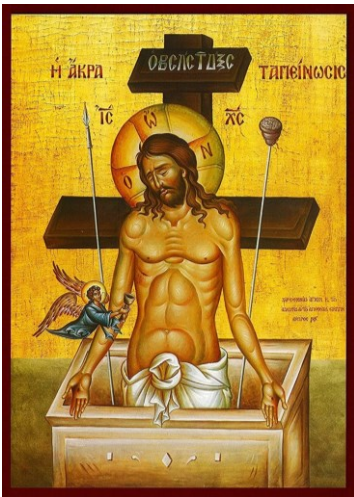
しかし、今、聖なる火で燃え盛る炎の剣が、ここにある！

炎の剣。それは二つの本性を持っている。一つは鉄の性質。それは鉄の国の人々と同じである。しかし、もう一つ、同時に火の性質を持つ。鉄は火によって真っ赤に燃えているが鉄としての性質は失われていない。火は、鉄とは違うものでありながら今や鉄と一体になっている。火の剣と鉄の剣が二本あってそれを重ねているのではない。二つの本性をもつ一本の剣なのである。

さて、いよいよ対決の時がやって来た。炎の剣を手にした勇者ティクヴァは、その丘の上でマヴェットが襲ってくるのを待ち構えた。真昼間だというのにあたり一面は暗闇に覆われ、地震で地面は揺れ動いた。

来た。マヴェットだ。巨大な黒い煙のような姿で目だけが赤く光っている。またもや愚か者が挑んできたという目でティクヴァを見下ろした。しかし、マヴェットには、聖なる火が見えなかった。単なる鉄の剣だと思い込んだマヴェットは、いつものように炎の剣をティクヴァもろとも飲み込んだ。すると、マヴェットの喉は切り裂かれ、剣は頭を貫き、同時に聖なる火はマヴェットをあっという間に焼き尽くした。地上に降り立った勇者ティクヴァも炎に包まれていたが、聖なる火によって燃やされることなく、凜として光を放っていた。





神は興き、その仇は散るべし

司祭 エフREM 後藤 悠太

「神父さんは聖書を読みなさい、読みなさい、と勧めますが、旧約聖書を読むと残酷な暴力ばかり描かれていて、気が滅入ってしまいます。」

旧約聖書を読んだ人なら、誰でもこのように感じることはありません。カインが弟アウェリ(アベル)を殺してしまった物語のように、人間の罪から暴力が生まれたのなら、まだ分かります。けれども、神御自身が人間に対して公然と暴挙を敢行する場面も、繰り返し、繰り返し描かれます。

ノイ(ノア)の箱舟の話ではどうでしょうか。人が地を暴虐で満たしたことに神は怒り、ノイの箱舟に乗らなかった者たちすべてを滅ぼされました。ソドムとゴモラの話では、悪を行っていたソドムとゴモラの人々を、「硫黄と火」とを降らせて滅ぼされました。「出エジプト」の話では、心を頑なにしたエジプト人達が、海に沈められました。等々、枚挙にいとまがありません。異邦人に対して神は、容赦なく暴挙を振るわれます。

しかし、神が暴挙に出る相手は、異邦人だけに限りません。イスラエリに対してもそうです。偶像崇拜を繰り返していたイスラエリに対し、「わたしはお前の敵となる」と神は言われました。そして彼らはバビロンに捕らわれて行きました。あの稀に見る暴君、バビロンの王ネブカドネツアルのことを、神は「私の僕」(イエレミヤ27:6)であるとさえ言われました。神はバビロン人という異邦人を使って、自らの民であるイスラエリに対して厳しい処分をなされたのです。

旧約時代の神の暴挙は、偶像、姦淫、冒瀆、罪、悪、殺人、誠めの違反といったものと、神との闘いでした。そしてこの闘いはやがて、決定的な神の勝利に終わります。完膚なきまでの勝利、完全な勝利、最終的な勝利です。旧約時代の神の闘いは、この最終的な勝利、すなわちハリストスによる勝利を前もって示している、と見ることもできます。

ではどのようにして、その最終的な勝利がもたらされたのでしょうか。その勝利には「十字架」という武器が使われました。旧約時代には神の勝利のために罪悪人を滅ぼす、という暴力が使われました。しかしハリストスは違います。非暴力という暴力、致命という暴力、受難という暴力が使われました。ハリストスの弟子達は世界を「転覆」(使徒行実17:6、文語訳参照)させた者であると、ハリストスを受け入れないユダヤ人達に呼ばれましたが、まさにこれは「あべこべ」です。ハリストスにおいては、全てが「転覆」したのです。この「あべこべ」な力の行使によって、罪、死、悪魔、悪は完全に滅ぼされました。旧約時代の神の暴挙は、ハリストスの十字架へと、神の憐みと赦しへと、神の平和へと収斂されていきました。この憐れみと赦しとは、全ての人に、旧約時代に神に滅ぼされた者も含めた全ての人々に及ぶものです。

ただ神の平和を望まない人々にとっては、神の憐みと赦しとは依然として脅威であり続ています。イサイヤが言うように、悪しき者は恵まれても、憐れまれても、必ずしも痛悔には至らないからです。悪しき人をさらに悪くすることすらあり得ます。悪しき人に苦痛をもたらすことすらあり得ます。

先日の復活祭で私たちが祝ったものとは、この神の完全なる勝利でした。「神は興き、その仇は散るべし」「神よ、立ちあがって、その敵を散らしてください」そこで皆さんは何度もこの祈禱文を聞いたはずですが、これは、紛れもなく私たちの祈りなのです。

『五旬経』と『八調経』

司祭 ルカ 田畑 隆平

正教会の奉神礼のサイクルを形成する祈祷書は、大きく分けて二つに分類されます。それは、①一日の奉神礼の土台となる『時課経』及び『奉事経』と、それらの祈祷を实践する上で、②日毎に変わる祈祷文が記載された祈祷書です。そしてこの②は、(1)日付(毎年変わらず固定)に基づく『月課経』(日本では『祭日経』として抄訳されている)と、(2)「聖大パスハ」(毎年日付が変わる)に基づく『歌経』と『八調経』に分けられ、また『歌経』も『三歌斎経』と『五旬経(三歌花経)』に分けられます。

今年ももうすぐ『五旬経』が終わり、『八調経』を使う時期になりますので、今回はこの『五旬経』と『八調経』という2冊の祈祷書についてお話し致します。

五旬経(ペンテコスタリオン)

この『五旬経』という名称は、「聖大パスハ」から「五旬祭(ペンテコステ)」までの日数である「50日間」に因んでいます。ですから元々『五旬経』には「パスハ」から「五旬祭」までの祈祷しか載っておらず、後になって「五旬祭」翌週の「五旬祭後第1主日/衆聖人の主日」が追加されたそうです。ですから現在の『五旬経』には、「パスハ」から「衆聖人の主日」までの8週間+1日、すなわち9主日分の期間の祈祷が載っています。

さて、『五旬経』に「衆聖人の主日」が含まれるようになった理由の一つに、「衆聖人の主日」(8調)を以て、パスハ翌週の「聖フォマの主日」(1調)から始まった調のサイクルが丁度一巡することが挙げられます(光明週間は1週間を通して「パスハの1日」と理解されるので、ここには含まれません)。ただし、『五旬経』の期間は特別ですので、様々な調がその週の調に組み合わされながら、徐々に8調のサイクルへと近付いていくように作られています。そして最後の「衆聖人の主日」になると、その日はほぼ8調のみとなります(ただし、「パスハ」から7週間後の「五旬祭」は7調を基調としていません)。

『五旬経』には、正教会で最も大きな祭である「聖大パスハ」と、二番目に大きな祭とされる「五旬祭」、そしてその橋渡しとなる「升天祭」と、正教の核となる三つの祭が収められており、この『五旬経』の期間を通して、パスハに洗礼を受けた光照者はキリスト教の奥義を学ぶのです。

なお、日本では『五旬経』は未だ『五旬経略』という抄訳版しか訳されていません。

八調経(オクトイコス)

『五旬経』のシーズンが終わると、今度は一年の3分の2を占める『八調経』がメインのシーズンがやってきます。『八調経』は8週間のサイクルという長いスパンで私たちの霊(たましい)を養い、正教徒としての成熟を促します。

皆さんが普段使っている聖体礼儀や徹夜祈の聖歌譜は、基本的にこの『八調経』に基づいて祈祷文や歌がセレクトされています。ですから通常の『八調経』のシーズンはこれらの聖歌譜に従っていれば間違わない(ただし省略はされている)のですが、祭日と重なったり、「聖大パスハ」の前後それぞれ8週間の『歌経』のシーズンになると、普段の聖歌譜をそのままでは使えなくなります。

ちなみに『八調経』シーズンの初日(「衆聖人の主日」翌月の月曜日)は「聖使徒の斎」の始まりの日となり、7月12日の「聖使徒ペトル・パウエル祭」まで斎となります。また『五旬経』と『三歌斎経』はどちらも不禁食週間から始まります(『五旬経』の最後の1週間も不禁食週間です)。このように季節ごとの祈祷書の使い始めに食事の規定が設けられているのも面白いですね。



2023

8月2日(水) - 4日(金)



コテージ宿泊



海浜公園での海水浴、磯遊び



秘湯の湯めぐり

キャンプだホイ!

ワクワク集まり、ドキドキ体験!
0~100歳までときめきキャンプ!

in あっさぶ

宿泊地: "ハチャムの森"

鶉ダムオートキャンプ場
桧山郡厚沢部町字木間内60-1
tel 0139-65-6886



参加費: おとな 15000円
高校生以下 無料

締め切り: 7月2日(日)まで

参加の申し込みは、所属教会または下記担当教会までご連絡下さい。
担当教会: 函館ハリストス正教会 040-0054 函館市元町3-13
電話 0138-23-7387 Fax 0138-23-7939 frclment205@gmail.com



北海道ブロック宿泊研修会 キャンプだホイ! in あっさぶ

実施日: 2023年8月2日(水)~4日(金)

開催地: 道南 厚沢部町

宿泊地: ハチャムの森

鶉ダムオートキャンプ場

桧山郡厚沢部町字木間内 60-1

tel 0139-65-6886

参加費: 大人 15,000円

高校生以下 無料

集合場所: 函館ハリストス正教会(13:00)

(或いは「ハチャムの森」に直接)

磯遊びや飛行機・凧などの工作、着物リメイクや秘湯巡りなど盛りだくさんな内容だよ!

宿はコテージなので安心して寝られるよ!



秋の盛岡、八幡平を満喫!

2023年度東日本主教区東北ブロック

信徒懇親会 & 教会学校修養会



今年度は信徒懇親会と教会学校修養会(キャンプ)を同時開催
自然豊かな環境で大人も子供ものびのびと交流を楽しみましょう
企画内容は現在鋭意検討中!

日時 2023年10月8日(日)~9日(月・祝)
開催場所 八幡平温泉郷 八幡平ハイツ
参加費 未定
申し込み 各教会にて受付
問合せ 盛岡ハリストス正教会
019-663-1218

東北ブロック 教会学校修養会

実施日: 2023年10月8日(日)~9日(月)

開催地: 岩手県盛岡市、八幡平市

宿泊地: 八幡平ハイツ

岩手県八幡平市八幡平温泉郷

tel 0195-78-2121

参加費: 未定

東北の今年の教会学校修養会は、秋に信徒懇親会と同時開催します。

1日目は温泉に入って美味しいご飯を食べてワイワイ過ごし、2日目は朝から子供たちが思いっきり楽しめる遊びを考えているよ! 学期内の気分転換にバッチリ!

